

料金後納

ゆうメール

# MACNEWS

〒616-8156

京都市右京区太秦西野町20

TEL 075-871-0374. FAX 075-882-3777

Eメール mac.terakoya@gmail.com

URL <http://www.mac-terakoya.com>

## 今月号の内容

※ ある日の授業風景(中学部)

※ この頃の子が「疲れた、疲れた」という訳は？

「こんばんは」

「はい、こんばんは」

次々と中学生が入室してきます。

以前、こんな中学生もいました。

「ただいま」と言って入室してきたのです。思わず、「お帰り」と言いましたが(^\_^)

6時50分になりました。

(この頃では、遅刻する者は皆無、やっと時間を守ることが出来るようになりました)

「トライアル用意して！」



えっ、中学生になってもトライアルをしているの？と言われそうですが・・・そうです、中学生もトライアルをしています。でも、**トライアルをしている重要性に気付くのは、ズーと先の就職試験の時なんです。**

世界最大の総合航空貨物輸送企業FedEx（保有飛行機666機、配送車両43000台従業員25万2000人）に勤めておられた育脳寺子屋の加盟教室、宝塚市の学習塾メモリー加納先生によれば、

**最近の就職適性検査では、パズルなどで空間認知能力もテストされるとのこと。**

多くの外資系の会社と同じく、FedExでも新入社員はほとんど採用されず、少なくとも

98%以上は中途採用。書類選考の後、面接が何回もあり「ぜひ採用したい」と思った人だけに就職適性検査を受検してもらう。

就職適性検査はパソコン上で行われ、実生活に結びついた計算問題、パズルのような問題、心理テストといったものが組み合わされて行われる。そして一つでも基準に達しなければ不合格となる。

例えば、計算能力は高く、心理テストの結果も非常に良好。ただ、パズル問題だけが基準に満たなかった。しかし、どれか一つでも基準を満たさなければ不合格と相成る。

この適性検査のテスト自体、世界的な外資系人材コンサルティング会社が開発したのだから、過去の膨大なデータに基づいているものだろうとのこと。

このような話を知り合いの企業経営者に話したところ、自社でも特に「空間認知能力」の欠如している人は絶対に採用しないとおっしゃっていました。

実は加納先生、「たったの90分で成績を上げられる勉強法」というタイトルの本を出版されました。次号のMACnewsにて詳しい内容をお知らせ致します。

ところで、OECD（経済協力開発機構）が始めたPISA学力テストでは、出来るだけ知識を実生活の様々な場面で活用できるかがテストされます。例えば、為替レートの問題など。

「育脳トライアル」にも、“どの店で買うのがお得”など実生活に結びついた問題が多く出されていますが、教科書だけでは実生活に対応できないとの考えから出題しています。

話を元に戻します。

「えっ、○○でもこの言葉の意味分からへんの？ はい、辞書で調べて！」

このようなやりとりがかなり頻繁にあります。

簡単な熟語の意味が分からないのです。

ここでは、次のような

連続する3つの偶数の和が96であるという。これらの偶数の中央の数を求めよ。

一次方程式の問題なのですが、さて、どの語句が分からなかったのでしょうか？

この生徒だけではなく、こここのところ毎年のように、この語句が分からないという生徒がいます。

「えっ、分からないの？」と思わず言ってしまった熟語、それは「**連続**」という言葉なのです。この言葉を知らない中学生が実に多いのです。

「和訳って何？」 と聞いてきた生徒もいます。

社会や理科の苦手な生徒は、内容以前に使われている語句にその原因があるのでは？  
このような簡単な熟語を知らないのですから。

今、多くの学習塾ではパソコンによる授業が行われていますが、**対話重視の自立型個別指導**でないと、このような事例は分からないままスルーされているのではないのでしょうか？

しーん

授業中ほとんど私語を話す生徒はいません。あまりに静かすぎて、寝ているのではないかと疑う生徒もいます。

「〇〇、寝てない？」

「寝ていませんよ」

「〇〇下手の考え休むに似たり！ いくら考えても分からない時は、ヒント出すよ！」

「大丈夫です、あともう少しでできます」

「それじゃ、頑張って！」

「この問題、分かりません」

「分かりませんでは、ヒントも出せないよ。ここまで考えたのですけど、これで良いのですか？ という聞き方でないと」

と、言うのですが・・・・

「〇〇、姿勢が悪い！ 姿勢が悪いと頭に血が流れないし、眠くなるよ！ 悪い姿勢を続けていると、腰の具合も悪くなるし、背筋を伸ばしましょう！」

実は声の大きさや姿勢、体温などは、ストレス耐性に大きくかかわっているのです。

声の大きい人は、しゃべっているうちに自然とストレスを放出しており、また姿勢の良い人は血液の流れや神経の伝わりが良く前向きな考えがしやすくなるとのこと。体温についても、うつ病の人は体温が低い傾向にあり、ストレス耐性との関連性が高いそうです。

大きな声で話すように、また姿勢について厳しく指導しているのは、このような事実があるからです。

学習に対する取り組み姿勢についても、「出来ない、分からない」など否定的な発言をした場合には、そのような言葉を使わないように注意しています。なぜなら、自分の発する否定的な言葉によって思考停止の状態になってしまうからです。

MACの中学部での授業は、到達度の伸びが大きい「完全習得学習プログラム」になっており、自発的に学習するための「マイペース学習」なのです。

従来ほとんどの塾や学校で採っているモデルでは、先生が生徒一人一人のつまずきをすべて見つけるのは無理であり、授業のスピードについても決めるのは先生だけ。その結果、呑み込みの速い生徒は退屈し、もっと時間が必要な生徒は置いていかれます。

「マイペース学習」では、自分の苦手なところでは、時間をかけることが出来ますし、後戻りすることもでき、受け身でない自発的な学習にすることが出来ます。

以前、今、小学校に入る生徒の65%は、今はない仕事に就くだろうと予測する説があると書きましたが、10年後、20年後を考えた時に、大切なのは何を教えるかではなく、どのように独学の姿勢を身に付けさせるかではないでしょうか？

したがって、MACでは小学部では学力の基礎・基本となる「読み・書き・ソロバン」を軸とした学習と、子供たちの知的好奇心を育み、自信を植え付け、子供たち自身の気づきに重きを置いた授業をしていますが、中学部では「いかにして学ぶか」を軸にした指導をしています。

ただし、「マイペース学習」では、もっと時間が必要な生徒については問題点があります。それは、丸暗記、テスト重視の学校の授業進度との兼ね合いです。

そのために、計画性のある予定学習が身に付けられるように自覚を促しています。具体的には、学校の進み具合を勘案し、遅れてきたときにはどのようにして自学自習をすればよいのか？ ということなのですが、頭の痛いのは、進み具合が遅くてもなんとも思わない、（思っているかもしれないのですが）生徒がいることです。

こちらのイライラが募ります(>\_<)

これがないければ、パーフェクトの授業形態になるのですが・・・・

### 「キャラの時代」という言葉をご存じですか？

「疲れた、あ～疲れた！」

と言って、今日も生徒が入室してきます。

「何にもしていないのに、なんで疲れるの？」

と、生徒には言っていましたが、“疲れる”その原因が分かりました。

この頃の子ども達は大変なのです。親が何を言っても「疲れた」と言っているのは、反抗期だから、だけではないのです。

その原因は、キャラの使い分けに疲れているのです。

例えば、先生には先生向けの性格を作る。

友達Aグループでは、まじめな子。

友達Bグループでは、ふざけたキャラクター。

家庭では、母親の気に入るキャラクターで、良い子ぶる。

これでは疲れますよね。本当の自分がないので、当然のごとくとてもしんどい。

昔は、内向けの顔と外向けの顔の二つで良かったのですが、今の子は違うのです。

教室でも、昔の子は家庭では反抗していても、教室ではニコニコしないまでも、ごく普通に授業を受けていましたが、今の子は違います。家庭での反抗的な態度を教室の中にまで持ってくる子がいるのです。いくら注意しても返事はしない、ぶすっとしている、説明をしても反応がない、とてもしにくいのです。家庭で十分に反抗できない何かがあるのでしょうか？

それでは、子どもの反抗期にはどのような対応をすれば良いのでしょうか？

- ・まず、過剰に反応しない。売り言葉に買い言葉で対応しないことです。いわゆる大人の対応で、あえて丁寧語を使って。
- ・「お殿様」「お姫様」にしない。間違っても、「お願いだから勉強して」というように、親が頼み込まないことです。

そして、

- ・子ども扱いはしないこと。

私の反抗期はと言いますと、長男と言うこともあって、母親が間違ったことを言った場合な

ど、それは違う等と言って、激しく反抗しました。(弟たちは、無視していましたが・・・)  
その時の親の言葉は「親に向かって生意気な！」というもので、よくバトルを繰り返していました。この言葉は、こちらが大人になっても言われましたが(^\_^;)

でも、これって自立の第一歩なのです。

反抗期は、精神的な自立を考えると、ないよりある方が良いでしょう。

自分のことは自分で考える、構わないでくれ

いちいち親の価値観を押しつけるな など

**ただし、反抗期の子は、自分でもどのように対処して良いか分からない不安とも戦っていることを理解する必要があります。**

ところが、反抗期のない子も増えています。

その場合の親子のパターンは、

- ① **葛藤のない親子関係**・・・欲しいものが与えられ「絶対にダメだ」と言われることも、理不尽な我慢を強いられることもなく、反抗の必要が無い。
- ② **親が支配型**・・・洋服、髪型、生活などすべてにわたって親の意のままになってきた子は、それに慣れきってしまっているため、反抗できない。
- ③ **親子の関係が薄い**・・・仕事などで忙しく、親子の接点が少ない。その分愛情も薄く、ぶつかる場合もない。

反抗期の無い子なら、それでいいではないかと思われるかもしれませんが、**過干渉や無関心**は大きな問題になる可能性があるのです。

警察の少年課に勤務されている少年育成指導官の書かれた「家庭内暴力」の本を読みますと、家庭内暴力を起こす子供の多くが「葛藤体験」をほとんど持っていないということです。

葛藤体験がないということは、典型的な過保護・過干渉の親に溺愛されて育てられた結果、「我慢」や「ルールを守る」「待つ」と言った葛藤を乗り越える機会がないまま育ってしまったということなのです。

その結果、友達との関係、学校の授業など親が手出しできないところで何かトラブルが起きた時、自分の力では対処できず、そのストレスやもどかしさが親を攻撃するという形で噴出(家庭内暴力)したり、不登校になったりすることがあるのです。

**親が、わが子可愛さで「よかれ」と思ってやっていることが、実は子供を苦しめる原因になる可能性があることを、知っておくべきでしょう。**